



室蘭工業大学

学術資源アーカイブ

Muroran Institute of Technology Academic Resources Archive



「ヘンリー八世」地誌考(前篇)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 室蘭工業大学 公開日: 2014-06-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 竹内, 豊 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10258/3345

「ヘンリー八世」地誌考 (前篇)

竹内 豊

Shakespeare's Place-Names Commentary Henry VIII (Part I)

Yutaka Takeuchi

Abstract

This commentary is designed to treat the names of places in Shakespeare's plays. Although the names of places are formally noted in many editions, they are summarily dismissed—usually in a line. The names of places stand in the background of the natural environment, and they are closely related with history of man.

This commentary is attempted in the belief that knowledge of names of places is an important step in understanding human works in many fields—especially in literature.

土地あるところ、必ずや人住み、歴史を生むであらう。その歴史とは、哲学であり、文学であり、宗教であり、美術、音楽である。そうしてしかも人は風土あるところのその人であり、それが文学であれば、「イギリスの文学」となり、「ドイツの文学」となる。またそれが「シェイクスピアの文学」となり、『ハムレット』である。「ゲーテの文学」は、『ファウスト』となる。その自然の背景と人間と歴史と不離の関係にあるものに地名がある。しかしながら地名は文学作品においてもその関心が人名に比して度合が薄い。シェイクスピアの作品においても各種のテキストの注は余りにも簡単で、なかには全く触れていないものもある。これは彼等イギリス人にとって自明だからというものではない(われわれが日本の地名について自明とは限らない)。

シェイクスピアの舞台はイギリス本土はもとより隣接諸国、遠くはアジア、アフリカとその範囲は広い。

地名の理解は、畢竟史的背景や他の文学作品との関連を知ることとなり、文学研究の一支柱と思われる。

昭和44年夏、「シェイクスピア・ツア」で訪れたシェイクスピアゆかりの地は筆者に強烈な印象を与えた。本考シリーズはそれが一つの契機となって生まれた。

シェイクスピアには37篇の劇があり、逐次コメントをつけてゆく予定であるが、本篇はその *Henry VIII* (都合により前篇と後篇に分けた) である。地名の記載の順序は劇の進行を追ったので、見出し語の地名の後に付した数字は、それがテキストに出た最初の個所を示すものである。



附 図 1

本劇の舞台もイギリス本土に限られておらず、また関連して出る固有名詞もイギリスばかりのものではないので、その表記は英語式に統一していない。また生年、没年、その他の記録については伝承あるいは古い昔のもののために定説のないもの（固有名詞の綴り方などに定まったものがない）があるが、それについては出来るだけ異説をあげるようにした。

1 London *Dramatis Personae* 付

いうまでもなくイギリスの首都。テムズ河口から直線で64 km、河沿いに80 km 上流にあり、河をはさんで市街が発達しているが、中心部は左岸、ロンドン橋の北方を占める部分にある。緯度は北緯51度半（市の中心のセント・ポール寺院が51.30 N, 0.05 W）であるが、冬はメキシコ湾流がもたらす天然の恩恵でその割に寒くない（日本にはこのような高緯度の地はない。カムチャッカ半島の南が相当する）。

平均気温（統計期間はロンドンが1931～1960、東京は1941～1970）

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
東京	4.1	4.8	7.9	13.5	18.0	21.3	25.2	26.7	23.0	16.9	11.7	6.6
ロンドン	4.2	4.4	6.6	9.3	12.4	15.8	17.6	17.2	14.8	10.8	7.2	5.2

ジュリアス・シーザーはロンドンについての記述を残していないが、タキトウスはその『年代記』¹⁾にロンドンは61年には既に商業の中心地をなしていたと誌している。

地名の変遷はタキトウスは Londinium (ca. 115年)、プトレマイオス²⁾は Londinion (ca. 150年)と誌し、『アングロ・サクソン年代記』³⁾は Lundenburg (457年)、ビード⁴⁾は Lundonia (ca. 730年)と記している。その後 Lundenne (839年)、Lundene (962年)、Lundin (1205年)と変わった。語幹の *londo-* は 'wild, bold' の意であるが、これは OE Irish の *lond*=wild に由来する。

2 Westminster *Dramatis Personae* 付

ロンドン 28 区のうちの一つ、ウエスト・エンド地区のことであるが、この地区だけが特別区となって、ウエストミンスター市と称され、国会議事堂、バッキンガム宮殿、ウエストミンスター大寺院、ホワイトホールその他諸官庁、ロンドン大学、大英博物館、国立美術館、ピカデリーサーカス、トラファルガー広場、ハイドパークなどの他、メイファーなどの高級住宅地をかかえているが、ウエストミンスターと普通いわれる場合はウエストミンスター大寺院と国会議事堂の附近といった極く狭い地域を指している。

3 Kimmalton *Dramatis Personae* 付 52.18 N 0.24 W

F は Kymmaltun, F₃ は Kimbolton, 現今の Kimbolton。イングランド中東部の Huntingdonshire (Hunts と略称する) にある。ここの起源は古く、Edward the Elder (r. 901~925. アルフレッド大王の次子) がデーン人に対抗するために、921 年にはこの地に城砦が設けられた。その後征服王ウィリアム一世⁵⁾ が築城したが、1174 年ヘンリー二世によって一部が取り壊された。今日この城は 1950 年来グラマー・スクールになっているが、ヘンリー八世の最初の妃であるキャサリンが王との離婚後 1533 年から没年の 1536 年まで住んだところでもあり、使用された部屋、使用された物が当時のままに保存されている。本稿はその目的が地誌にあるが、この王妃は『ヘンリー八世』の主要な人物であるから、ここに簡単に説明することとする。妃は Catherine of Aragon ともいわれる。1469 年アラゴン王国のフェルナンド五世 Ferdinand V (1452. 3. 10~1516. 1. 23) はカステリヤ Castile のエンリケ四世 Enrique IV の妹イサベル Isabella (後のイサベル一世。1451. 4. 22~1504. 11. 26) と結婚、これによりスペインは 1479 年に統一国家となったが、この二人の間に 1485 年 12 月 15 日生まれた末子がキャサリンである。2 歳の時、イギリスのヘンリー七世の王子アーサー Arthur, Prince of Wales⁶⁾ の王妃と決められ、1501 年 10 月 2 日プリマス⁷⁾ に着き、11 月 14 日セント・ポール寺院 St. Paul's Cathe-

dral で結婚式があげられた。キャサリン 16 歳、アーサーは 15 歳であった。しかし、アーサーが翌 1502 年 4 月 2 日ラドロ⁸⁾の Ludlow Castle で死んだ。その後彼女は 1509 年 6 月 11 日にアーサーの弟（後のヘンリー八世）と結婚した。キャサリンは既に 23 歳をすぎ、王子は 18 歳であった。彼女は 1510 年 1 月から 1518 年の 11 月までの間に、2 人の男児と 4 人の女兒を産んだが、1516 年 2 月 18 日、月曜、グリニッチ（17 項参看）で生まれたメアリ（1516~1558. 11. 17。ヘンリー八世歿後の女王で Bloody Mary と呼ばれた。r. 1553~58）という王女だけしか育たなかった。王は男児を熱望していた。王子が育たなければ半世紀にもならないテューダー王朝は早くも崩壊するかも知れない、と心配した。このことが王とキャサリンの離婚の大きな理由であった。王は産れる子供が生後すぐに死んだり、死産、流産するのは、それが兄の寡婦を娶ったことの神罰だと考えた。まさに「人もしその兄弟の妻を取らば是汚はしき事なり」（レビ記第 20 章 21 節）である。劇中でもこのことは王の口から述べられている（II. iv. 179~199）。しかもまた、この頃王は王妃の侍女で、美貌にして才気に富むアン・ボレーン⁹⁾の魅力に惑われて、これを迎えようとする気持が、更にキャサリンとの離婚に拍車をかけた。とにかくこの離婚問題はイギリス宗教改革の発端となるなど国内においても大きな問題を引き起こしたにとどまらず、歴史上大きな、しかも有名な国際問題とまでなった。王は 1526 年頃からキャサリンを退ける方策をとりはじめた。彼女は 1531 年王とも、またメアリとも別れて、Hertford 州の Moor という町に、更に 1533 年まで Bedford 州の Amptill（ロンドンの北西約 42 km）の Castle に住み、1533 年王とアン・ボレーンの結婚が断行されて、彼女は決定的に宮廷を追われて Kimbolton に移り、1536 年 1 月 7 日失意のうちに死亡した。遺骸は Northampton 州の Peterborough にある Cathedral に埋葬された（15 項参看）。

4 Norfolk 第 1 幕ト書

‘The northern people’ の意で、Humber 河の北に住む人を指したもの。イングランド東部の北海に面する州。農業と漁業が主産業。特に Redpoll（ま

たは Redpole) という無角の赤牛と七面鳥の生産及びニシンの漁場で有名。殊に Great Yarmouth はニシン漁の中心港であり、また Dickens の作品 *David Copperfield* に挿話的人物として登場する可憐な少女 Little Em'ly の育った町でもある。

州の首都はノリッジ Norwich で、歴史の古さと、ソールズベリー塔 (18 項参看) に次ぐ高い尖塔をもつノルマン様式の聖堂で有名である。

5 Buckingham 第1幕ト書

地名の由来は 'The Hamm of Bucca's people' で, Buccingahamm (918 年), Buccingaham (1000 年) などを経て, 今日の Buckingham となった。Bucks と略称されるイングランド中部南西に位置し, 農業, 牧畜が主産業。首都はエイルズベリー Aylesbury である。この州は (イギリス) 文学と由緒深いところで, 特に Thomas Gray はイートン¹⁰⁾ から南へ約 8 km のストウク・ポウジズ Stoke Poges (ロンドンの西約 23 km) の墓地でその *Elegy* の詩趣を得たといわれる。そうしてその因縁は深く, 彼が 1771 年にケンブリッジで亡くなったが, 彼の名を不朽としたこの墓地 (ストウク・ポウジズ教会の東側に), しかも母と共に葬られている。彼が母を語る墓碑銘は次の通りである。

“Dorothy Gray, the careful, tender mother of many children, of whom one alone had had the misfortune to survive her”.

Thomas Gray は生まれた 12 人の子供のうちで育ったたった一人の子供であった。

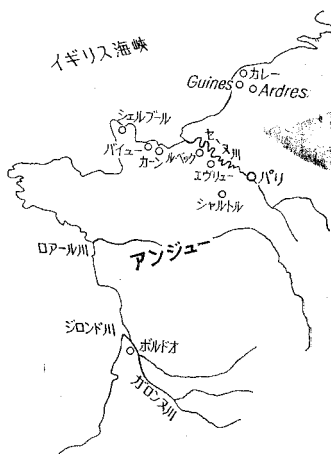
6 Abergavenny 第1幕ト書 51.50 N 3.00 W

F では Aburgany, Rowe の第 1 版では Avergavenny となっている。ウェイルズのモンマス Monmouth 州にあり, ウェイルズ語で Abergefenni。ローマのブリタニア支配時代は Gobannium の名であった。これはケルト語の *Gobannion* に由来し, 個人名であったらしい。今日の Abergavenny の *Aber-* はウェイルズ語で 'confluence, mouth of a river' の意で, それが

Ask 川と Gavenny 川の合流点であることによる。ブリストル海峡 Bristol Channel に注ぐセヴェン川（注8）参看）の河口に注ぐ長さ 113 km のアスク川に面する町で、鉱業生産の町である。

7 Andren I. i. 7

Andern と綴る。劇中に ‘Met in the vale of Andren. / ‘Twixt Guynes and Arde;’ (I. i. 7~8) とあるように、フランスのカレー Calais の町の近くの Guynes と Ardres (8 及び9項参看) の間にある平原で、ここでヘンリー八世は 1520 年 6 月 7 日から 20 日までの間に、フランス王フランソワ一世 François I (1494. 9. 12~1547. 3. 31) に招かれて会見した。当時神聖ローマ皇帝、ハプスブルク家 Habsburg のカルル五世 Karl V (1500. 2. 24~1558. 9. 21) はその支配を全ヨーロッパに拡げようとしており、一方かつてドイツ皇帝の位をカルル五世と争って敗れた (1519年) フランソワ一世はハプスブルク家の勢力の伸長をよろこばず、それを排除しようとして、ヘンリー八世を味方に引き寄せようと計画した。そのため特にフランソワ一世はこの Andren の谷間が後世 ‘The field of the Cloth of Gold’ と称される程に天幕、宿舎、服飾、その他万般にわたり、金に糸目をつけずに飾り立てたが、ヘンリー八世の協力を引き出すことに成功しなかった。



附 図 2

8 Guynes I. i. 8 50.51 N 1.52 E

Guynes のこと。カレーの南約 12 km の地にある。1352 年から 1558 年までイギリス領であった。

9 Arde I. i. 8 50.51 N 1.59 E

現今は Ardres と綴る。カレーの南東約 15 km の地。シェイクスピアは Raphael Holinshed と Edward Halle に従って Arde としている。

10 Yoke I. i. 51 53.58 N 1.05 W

ロンドンの北東約 316 km, 汽車で約 3 時間の地にある。かつてのノーサンブリア¹²⁾の首都。現今ヨーク州の首都。ヨークは現存する中世都市の外壁 City walls のうちで最も素晴らしいものを有し(最初の基礎は約 180 年頃に築かれた), その中世の美しい, 静かな姿を今日まで伝えている稀な都市で, また英国最古の都市でもある。ここはローマのブリタニア支配時代にはエブラクム¹³⁾と称された。71 年に知事ペティリウス・ケリアス¹⁴⁾によってこの地の占領が行なわれ, 当時リンカーン(次篇 II 参看)にあったローマ軍団第 9 軍団の半永久的の設営地となり, 更に 12 年後に恒久的な城塞が築かれて, チェスター¹⁵⁾, カーリーアン¹⁶⁾と共にブリタニアにおけるローマ軍団の三大駐屯地の一つになった。それはこの地がウーズ Ouse とフォス Foss という二つの川の合流地点であり, しかもウーズ川はこのヨークまで相当な船の航行が可能という利点の他に, 南北の低地を分つ丘が迫り, そこをスコットランドに通ずる道路が走り, ブリタニア北部の各地に睨みをきかすことの出来る戦略上恵まれた条件を具備していたからである。そうしてハドリアヌス帝¹⁷⁾がここを訪れたのは 121 年のことであった。帝はこの地を訪れた最初のローマ皇帝であった。またセプティミウス・セウェルス帝¹⁸⁾が, フランシス・ベーコンの言葉によると「さあ, まだ何か俺のしなければならぬことはないか」¹⁹⁾といて, その輝かしい生涯を終えたのはこのヨークであった。更にコンスタンティヌス大帝の父コンスタンティウス・クロールス帝²⁰⁾もこの地で亡くなっている。このようにローマ皇帝が屢々訪れ, または滞在していたことからヨークが極めて重要な地であったことが窺える。ヨークはその後 865 年スカジナヴィヤ人により, 876 年に一時デーン人の主要な駐屯地となり,

更に10世紀には Irish-Viking の占めるところとなった。今日の York の名は彼等の言葉 *Iórvík* (962年) に由来し、これが *Iórk*, *ȝeork*, *ȝork* と変って、13世紀に York となった。

この地には征服王ウィリアム一世の築城した城が2つあったが、現在残っているのはその二番目のものである。

この市の最も著名な建造物は York Minster (Cathedral といわない) と呼ばれる大寺院大聖堂(本寺)で、これは中世建築の教会でイギリス最大の規模のものである²¹⁾。この本寺の起りはノーサンブリアの王であったエドウィン²²⁾の洗礼のためにヨークの第一代主教パウリヌス²³⁾によって627年の Easter Day に建造された(教会堂跡が現存している)ことにある。最初は木造であったが、699年に当時ヨークの大主教であったウィルフリッド²⁴⁾により石造とされたが、これは741年頃に崩壊した。その後767~80年にかけて石造で再建されたが、これもノーマン・コンクエストに伴った騒擾でヨークの町と共に破壊された。その後約250年間に再建↔破壊が繰返され、ほぼ現在の形を整えたのは15世紀のことである。この本寺はイギリスのゴシック建築史上初英式 Early-English から文飾式(盛飾式) Decorated の移行の段階を示すものである。すなわち、本寺の著名な大窓「五人姉妹」Five Sisters はノーマンの半円形から初英式の尖頭形と変ったことを示し、更に身廊、エクセターは穹窿をなす石の肋材が細く、数は逆に増えて、聖堂の高く広い天井に、美しく装飾的に網模様を描く文飾式を代表している。そうしてこの大窓を埋める Grisaille glass は中世以来この本寺の120箇所を越える窓にはめ込まれて本寺の荘麗さを飾るものなかで最も有名なものである。

ヨーク本寺は英国教会の北部の大主教の管区の総本山で、全国43の監督管区の中の14を管轄下において、南部の29を管轄するカンタベリ大寺院につぐ地位を占めている。本劇に登場するウルジィ²⁵⁾は1514年この大主教となっている。

稀代の追い剥ぎターピン²⁶⁾が処刑されたのはここヨークであった。ガイ・フォークス²⁷⁾が生まれたのもここである。また Daniel Defoe は『ロビンソ

ン・クルーソー』の物語を「私は1632年ヨークで生まれた」「I was born in the year 1632, in the city of York, of a good family, though not of that country.」で書き始めている。

11 Bordeaux I. i. 96 44.50 N 0.34 W

FではBurdeauxとなっている。フランス南西部の港市。ビスケ湾 Bay of Biscax からジロンド川 Gironde を98 km 遡り、ガロンヌ川 Garonne に結ぶ地点に位置する。パリからは480 kmである。世界の酒庫、フランスの貴重な酒庫であるメドック Medoc 丘陵を控える。フランス王ルイ七世と離婚したエレノール=ダキテーヌが1152年ヘンリー二世と結婚して以来²⁸⁾、百年戦争でイギリスが敗退する1453年までイギリス領であった。そのためボルドオ酒の主要な輸出先はイギリスであった。エドワード二世²⁹⁾は自分の戴冠式用にブドウ酒1,000樽を送らせたことは有名である。かつてこの市の市長をモンテーニュ³⁰⁾がつかとめたことがあり、またこの地の古い大学の入口ホールの真中にある大きな寝棺は1716~26年までボルドオ高等法院長であったモンテスキュー³¹⁾のものだとの伝えがある。

12 Ipswich I. i. 138 52.04 N 1.10 E

Suffolk 州の都市。ウルジィの生地。ロンドンから北東に約111 km。この町の古名はGipeswic (993年)で、これがIpeswich→Ipswichとなったが、由来はGipeなる個人名から‘the village of Gipe’となったという説と、またこの町がOrwell川の河口にあって、その形がgip=to yawnであるところから、という二説がある。また実在も記録もないがYpusという王がいて、町をYpeswichと名づけたとも伝えられる。

本劇中にウルジィは自分の生地IpswichとOxfordに大学設立の計画を述べているが、生地の方はその門だけが建てられて(1536年)今日それが残り、Oxfordの方はその計画は実現して、今日のChrist Churchがそれである。Christ ChurchはOxford 25の学寮中最もその規模と堂塔の美しさを誇

り、ヨーロッパ最大の学寮といわれ、また建築史上にあってもゴシックの注目すべき垂直様式がこのホールの階段にみられる。ウルジィは 1525 年イギリス全土の僧院からこの学寮の建設資金を絞り取ったといわれている。

13 Hereford I. i. 200

ヘレフォードと読む。F では Hertford, *Richard II* には Herford として出る。Hertford は別の州、別の町の名で、それを Hereford と misreading したらしい。ウェイルズに接する直径約 48 km の円形をなし、赤い体に白い顔の牧牛と果樹園（特にリンゴ）で知られる州。都会の少ない州で首都が Hereford (52.04 N 2.43 W) で、元来 army ford の意。鉄道でロンドンから 230 km。町の起源は古く、7 世紀の West Saxons による。この町に 1220 年、美しい初英式の Lady Chapel が建立されたが、この聖堂の起源は 794 年にマーシア（注 12 参看）の王オッフア³²⁾によって殺害されたイースト・アングリア（注 12 参看）の王エセルベルト³³⁾の亡霊が死体を Hereford に埋葬せよ、と命じたことにより、825 年オッフアの後継者がここに石造りの教会を建てたに由来するという。また町の中央部にある All Saints という教会にはシェイクスピア劇を特に得意とする 18 世紀最大の名優ギャリック David Garrick (1717~79) の出生記録がある。

14 Stafford I. i. 200

Staffordshire, これは Staffs と略称される。Stæfford, Stadford, Statford と変遷がある。‘ford by a landing place’ の意。イングランド中西部の州で、いわゆる Black Country の大部分を占める地帯である。首都は Stafford (52.48 N 2.07 W) である。この地は今日も日本語訳の定訳のない *The Compleat Angler* (釣魚大全) の著者 Izack Walton (1593~1683) の生地である。

15 Northampton I. i. 200

バッキンガム州をはじめ 9 つの州に接し、北東から南西に細長いイングラ

ンド中南部の州で、Northants と略称される。North+*hamtun* (=home farm, the village proper) の意。ここはイギリス屈指の靴製造業の盛んな地方で中心地は首都の Northampton (52.14N 0.54 W) である。ここはノルマン王朝、アンジュー(プランタジェネット)王朝の王の居するところとなったため、屢々議会や会議が開かれた。1164年トマス・ア・ベケット³⁴⁾の告発と裁判が行なわれたところでもあり、またバラ戦争の決戦の一つが1460年ここで行なわれて、ランカスター家は敗北し、ヘンリー六世が捕えられた。またシェイクスピア作 *King John* の開幕はこの地である。この町から国道45号線を約6km北東に向ったところのエクトン Ecton はフランクリン Benjamin Franklin の父が1685年アメリカに移住するまで、一家が代々居住していた町である。同じく国道45号線を約10km行ったアールズ・バートン Earls Barton には10世紀後半に初建されたままのサクソン塔、しかも現存するサクソン塔のうち最も装飾に富む West Tower をもつ万霊教会 All Saints がある。またこの州のオールドウィンクル Aldwinkle は John Dryden の生地である。

この州にありながら「行政上の一州」(administrative county) をなして「ピーターバラ特別区」Soke of Peterborough の名を有するピーターバラ市 (52.35 N 0.15 W) にある聖堂にはアラゴンのキャサリン (3項参看) の墓がある。またこの同じ墓地にスコットランドの女王メアリ・ステュアート Mary Stuart (『マクベス』地誌考参看) の墓もあったが、これは1612年子息ジェームズ一世によって Westminster Abbey に移された。

16 Saint Lawrence Poultney 地区の Rose I. ii. 152

ロンドンの Canwiki Street ward に Saint Laurence Poultnie という教区があって、その中に Rose というところがある。1561年に Marchant-Tailors (the Merchant Tailors) が建てた可成り著名な学校であったが、Mannor of the Rose という荘園となり、一時はバッキンガム公の居館となっていたという。

17 Greenwich I. ii. 188 51.28 N 0.00

名の変遷は Gronewic→Grenewic→Grenawic などで, Green+wic (=village, hamlet, town, dwelling-place) の意。ロンドンの東南にある自治区で, テムズ河の下流ロンドン橋から約9 km の河畔にある。港を見下す丘にあるグリニッチ公園には1675年チャールズ二世(1630.5.29~1685.2.6。r.1660~85。クロムウェル Cromwell 革命後の王となった)の命によって, クリスタファ・レン³⁵⁾の手になる八角形の王立天文台 Royal Greenwich Observatory がある。北緯50°28'38", 本部子午線が通過する経度0°0'00"の地点である。この天文台そのものは第二次大戦後ロンドンの南東約72 km の East Sussex にあるハーストマンズー Herstmonceux (または Hurstmonceux) Castle (50.53 N 0.20 E) に移されたため, こちらの方は博物館となっている。またこの離宮はテューダー朝には屢々行幸があり, またヘンリー八世, メアリ女王, エリザベス一世がここで生まれている。1652年この離宮はクロムウェルによって Greewich Green として公開されて大いににぎわい, Dicken の描く *Greenwich Fair* の舞台でもあった。

18 Sal'sbury I. ii. 196 51.05 N 1.48 W

F は Salsbury, F₂ が Salisbury。現今 Salisbury。ロンドンを距る約132 km のドライブ。Wiltshire の首都で, しかも古都である。古代ローマ人がソールスバリの北約3 km の地点のオールド・セアラム Old Sarum の丘の上に城下町をつくって, Sorbiodunum と名づけ, ブリタニア征服の一拠点とした。その後サクソン人が渡来してここを Searobyrg と呼んだ。22歳の若さで王位につき文武両道にすぐれ輝かしい功績を残した Wessex のアルフレッド大王 Alfred the Great (ca. 848~899. 10. 26. または 28. r. 871~899) はここに強固な土塁を築き, 更にノルマン人は Sarisberie と名づけて立派な城郭と司祭管区の聖堂を建てるなど, その名はヨーロッパにひびく程の有名な都市となったが, 13世紀になって増大する人口に対する水不足, また火災と風害の

脅威などから1217年この地の司教となったりリチャード・プウア Richard Poor (または Poore, Poure, Le Poor. 1237年死亡) が1220年丘を降りて現在の地点に町が移った。ためにこの地が New Sarum とも称される。彼はこの低地に大聖堂建設の事業に着手した。これは今日イギリスにある27の大聖堂のうち比類のない高さ(約125m)を誇り、建築の内部、外部構造が一つの様式——つまり初英式ゴシック建築で貫かれた点で著名である。ここには35,475(1961年)の人口に比べ、この大聖堂のほかに30の教会堂があるといわれる。町並はいわゆる black and white という黒い梁材に白い漆喰い壁が並ぶ古く、美しい町である。

この町と英文学との因縁は深く、シェイクスピア, Fielding, Hardy, Dickens, Hudson, Morris, Goldsmith, Trollope, Pepys, Sassoon が扱っている。シェイクスピア劇 *Richard III* のリチャード三世が第二代バッキンガム公 (*Henry VIII* に登場するバッキンガム公の父 Henry Stafford のこと。ca. 1454~1483) を暗殺したのはこの町の Blue Bour という旅館であったといわれる。

19 Louvre I. iii. 23

パリのルーヴル宮。セーヌ河の右岸に建つ。起源は1200年にフランス王フィリップ・オーギュスト³⁶⁾が当時のパリをかこむ城壁の外郭につくった城砦で、今日その東端にある「方形宮」Cour Carréeの辺りが1200年当時の位置である。その後14世紀にシャルル五世³⁷⁾が改築し、特に1546年以来増改築が行なわれ、1863年から5年がかりでセーヌ河沿いに長大なギャラリーが建てられて、ほぼ現在の規模をなした。宮殿として使われた時期は少なく、美術館として現在そのかかえる美術品は質量共に世界最大を誇っている。

20 York Place I. iv. ト書

York House とも称される。元々は1298年ヨークの大主教に買収され、改造された大邸宅で、爾来230年間ヨーク大主教の居館となってきた。故にこ

の名はそれに因んでいる。ウルジィ失脚の1529年にヘンリー八世の手中となり、その名もWhitehallと改められた。1698年この宮殿が焼失するまではイギリス宮廷の宮殿であった。ヘンリー八世は1533年この宮殿でアン・ボレーンと結婚し、また、1547年1月28日王はここで死去している。チャールズ一世は cromwell 派の手にかかって1649年1月30日この宮殿の前で処刑されており、また cromwell は1658年9月3日この宮殿で死去している。

現在この Whitehall の名は、議会やウェストミンスター大寺院の北、政府の主要な官庁の立ち並ぶ大通りの地名として残っている。

21 Rochford I. iv. 92 51.36 N 0.43 E

Essex 州の南部。テムズ河の北を河と平行に走る国道127号線を東に進み、ロンドンより約60 km。テムズ河が外洋と接する辺りにある有名な海浜行楽地、通称 Southend-on-sea の北約6.5 kmの地にある。地名の由来は OE *ræcces-ford* (=the ford of the huntingdog) である。ここにアン・ボレーンの父の建てたテューダー朝式の館がある。

22 Surrey II. i. 43

OE *sūper-gē* (=southerndistrict) のようにロンドン南部に接する州。首都は Kingston-on-Thames である。テムズ河及びその支流のヴァンドル Wandle, ブラックウォーター Blackwater, モール Mole, ウェイ Wey の諸川はよく農業をおこし、果実、馬鈴薯、ホップの栽培が盛んである。この州の中央南部にある市ドーキング Dorking の北東にある Box Hill は George Meredith が1867年来永住の地としたところであり、またこの Box Hill の麓の Burford Bridge Hotel は John Keats が 'A thing of beauty is a joy for ever' に始まる不朽の名作 *Endymion* を書き上げたところである。1817年11月のことであった。R. L. Stevenson も1878~86の間に4度もここに滞在したといわれている。

23 Toledo II. i. 164 39.52 N 4.02 W

スペイン中央部、トレド県の首都。マドリード Madrid の南南西約 65 km, 蕭条たる丘の上に建つ典型的なスペイン風の都市で、ローマ時代以前に起源をもつ古い都市である。13 世紀の大寺院をはじめ、多くの歴史的建築物が残っている。1065~1561 年までスペインの首都であった。

24 Suffolk II. ii. ト書

Norfolk が 'the northern people' であるのに対し、これは 'the southern people' の意である。行政上 East Suffolk と West Suffolk に二分されている。バター生産とニンジン及びサバの漁場で有名。ウルジの生地 Ipswich は East Suffolk である。

25 Black-Friars II. ii. 138

ロンドン塔から 3 つ目の橋 Blackfriars Bridge がかかるテムズ河北岸一帯を指す。13 世紀頃にドミニカ修道僧がこの辺りに居住したため、彼等の着ている黒衣から Blackfriars と名付けられた。現在の Blackfriars Bridge も元の名は Pitt Bridge であった。ドミニカ修道僧はここに大きな修道院を建てたが、今日ではその見るべき跡はない。この僧院で 1382 年ウィクリフ³⁸⁾ の 24 の教条を異端とする集会が行なわれた。また 1529 年にはヘンリー八世の王妃アラゴンのキャサリンに対する離婚の宣告がなされたところである。

26 Caernarvonshire II. iii. 47

ウェイルズでの最高峰 Mt. Snowdon (約 1,000 m) を有する 14 峰の丘陵をかかえる山岳の地。スレートの産で有名。有史以前の遺跡に恵まれている。この地で最も有名なものは Caernarvon Castle と Conway Castle である。前者は 1283 年エドワード一世 (Henry III の子。1239.6.17.~1307.7.7。Edward Longshanks と通称される。『マクベス』地誌考」参看) の起工になり、王の北ウェ

イルズ征服のために築かれた6つの城塞——Flint (1277), Rhuddlan (1227), Conway (1283), Harlech (1283), Beaumaris (1295) とこの Caernarvon——のうち最も重要なものであった。そうして1327~1330年間に完成した。皇太子エドワード（注29）参看）はこの城内で1284年4月25日に生まれた。王はこの王子を新属の国民、すなわちウェイルズの人民にこの城の Queen's Gate で 'a Prince of Wales who could speak no English' と紹介したといわれる（注6）参看）。しかしこの話は1584年以後につくられた作り話とされている。一方後者の Conway 城も1283年に起工された古城で、Caernarvon 城やカーフィリィ城 Ca(e)rphilly Castle（ウェイルズにあって、ウィンザー城を除いて全英中最大の城）よりは規模は小さく、また大きさもないが、美しさは群を抜き、ウェイルズの城のうちで白眉のものである。

シェイクスピア時代はこの地はただ山の多い不毛の地としか知られていなかった。

27 Pembroke II. iii. 63

ウェイルズの最南西端の州で、首都は Haverfordwest である。野性的で壮大な、内陸にまで深く入り込んだノコギリ状の海岸線をもって有名な、起伏の多い変化に富んだ州。農作物、鉱産物の生産があるが、面積の半分は牧畜業のために利用されている。州は Pembroke, Pembrokeshire と呼ばれるが、その州の中に Pembroke という町がある。ここはヘンリー七世が1457年1月28日生まれた古城があったが、1648年クロムウェルによって取り壊された。

Holinshed (p. 928) によると1532年ウィンザー城にきていたヘンリー八世はアン・ボレーンにペムブロークの侯爵夫人という栄誉と年金1,000ポンドを与えている。そのことは劇中にも使われている。

28 Canterbury II. iv. 219 51.17 N 1.05 W

OE で *Cantwaraburg*, ME で *Cauntirbyry* で「ケント人の町砦」の意。

ローマ支配時代は Durovernum といい、「岩の傍の沼沢地」の意である。ロンドンから鉄道で約 100 km。ケント州の都市。由みに州の首都は Maidstone。ローマ時代に造られた有名なローマン・ロードが海岸の Dover, Lympne, Richborough からカンタベリに集まり、ここから広い道路がロンドンに通じているように、ここは大陸とロンドンを結ぶ廊下の主要な地点であった。今日国道 2 号線がロンドンからカンベリを経てドーヴァーに至り、またカンタベリの近くから Rochester (次篇 II 参看) まで M₂ (Motorways 自動車高速道路) が開通している。

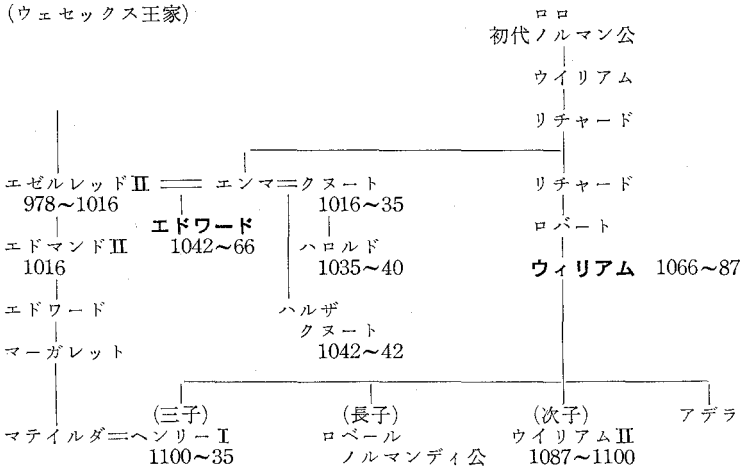
カンタベリはいうまでもなくアングリカン、つまり英国国教の総本山 the Mother Church of Anglican Christendom のある古都である。都市の起源は七王国の時代に一番先に勢力を得たのがケントであった。それはこのケント王国が大陸に最も近く、大陸文化を早く吸収したことにその一因があるが、殊にエセルバルト王 (注 22 参看、以下重複するところあり) の時に優勢であった。そしてこの王は 560 年頃この地を首都としたが、王妃バルサ Bertha (または Bercia) がフランク王の娘でキリスト教徒であったということから 597 年アウグスティヌスが仲間と共にケント州のサニット島³⁹⁾ のエズフレット⁴⁰⁾ に上陸した際に王はキリスト教の布教を許した。この時にカンタベリの今日の地位が決ったとってよい。彼等はカンタベリで教化に当り、1 年間に 1 万人をキリスト教に改宗させたといわれる。アウグスティヌスはこの地に 598 年ベネディクト修道院を建てた。その後 601 年 (一説に 600 年) 彼は 'Bishop of the English' として再びカンタベリに戻り、602 年ローマ時代にあった教会堂趾に新しい教会堂と修道院とを建てた。この教会堂が大寺院大聖堂の最初の姿であるとされている。これは 1067 年焼失したが、1089 年に最初のノルマン人大主教ランフランク⁴¹⁾ がノルマン式で再建に着手し、事業はランフランクの弟子で、且つ 1093 年にここの第二代大主教となったアンセルム Anselm (1033~1109. 4. 21。イングランド王ウィリアム二世、通称 William Rufus によって大主教に任命された) に継がれ、規模は更に広げられたが、1174 年にまたまた焼失した。再建はすぐに行なわれた。今度はフランスの建築家

サンスのギョーム William of Sens の設計で進められ、内陣が完成したのが 1180 年 4 月 19 日であった。工事は更に進められて、1184 年実に 10 年の歳月を費して完成した。この間の記録は当時カンタベリの修道士ジャーヴェーズ Gervase (Gervasius Dorobornensis. fl. 1188) の手で残された。聖堂は更に 1379 年から 1400 年、1495 年から 1503 年と増築工事が行なわれ、現在の規模のものとなった。大聖堂の正式名は Christ Church Cathedral である。取分けこのカンタベリをキリスト教世界でローマにつぐ霊場としたのは実にトマス・ア・ベケット大主教の殉教である（注 34）参看。

（昭和 48 年 5 月 21 日受理）

注

- 1) Cornelius Tacitus ca. 55~115 以後。ローマ第一の史家。『年代記』Annales と『歴史』Historiae の二大著書が有名。
- 2) Ptolemaios Klaudios (希), Ptolemaeus Claudius (羅) fl. 127~151。アレキサンドリアの数学者、天文学者、地理学者、英語読みでトレネーミといわれる。
- 3) *The Anglo-Saxon Chronicle* 1 世紀から 1154 年までを OE で記録したイギリス年代史。9 世紀から 12 世紀中頃までの間にカンタベリなど各地の修道士の手になったもの。この国史編纂事業はアルフレッド大王の命によってなされたものである。
- 4) Bede, Beda, Baeda とも綴られ、通常 Venerable (尊者) の名が冠せられる。ca. 673~735。ベネディクト修道士でジャロー Jarrow (54.59 N 1.29 W。ニューカースル Newcastle の東約 11 km) の修道院で終生を過した。有名な『英国教会史』*Historia Ecclesiastica Gentis Anglorum* (=Ecclesiastical History of the English Nation) を著した。
- 5) William the Conqueror イングランド国王になる前はノルマンディ公ギョーム。1066 年エドワード証信王 (懺悔王) Edward the Confessor (r. 1042~66) が死ぬとイングランド王位継承権を主張して (エドワードの筋違い従兄弟? を理由に) 1066 年 9 月 28 日早晩イングランド南海岸 Sussex 州のペヴェンジー Pevensey に上陸し、10 月 14 日既に擁立していたハロルド Harold (Edward the Confessor の義兄弟。ca. 1022~1066. 10. 14。当時 Wessex 王の武将の出でクヌート王の宮廷で実力者となっていたゴドウィン Godwin(e) は自分の娘を Edward の妃とした。1066 年王が嗣子もなく没するとゴドウィンは自分の子ハロルドを即位させた) をヘースティングス Hastings (次篇 II 参看) の北 72 km の高地センラック Senlac で敗死させた。その場所はこの戦いにより今日 Battle の地名がついており、ウイリアム王はここに Battle Abbey という修道院を建てている。ウイリアムは同年クリスマスに Edward の創建



になるウェストミンスター・アベイで戴冠し（ウイリアム征服王は Wessex 王国の首都ウインチェスター Winchester でも戴冠式を行なっている）、ノルマンディ公をも兼ねてイングランド王ウイリアム一世と称した。これが英国史上有名なノーマン・コンクエスト Norman Conquest であり、また同じく英国史上有名な 1066 年の年号である（なお、イギリスはこれ以来外国の侵入を受けていない）。

またノルマンディ公ギョームがハロルドを圧えてイングランド王ウイリアムになるまでの一部始終とその前後の事情をも含めての記録は、今日ノルマンディのバイユー Bayeux の美術館に陳列されている有名な「バイユーの壁かけ」Bayeux Tapestry に素朴ながら実に驚くべき程詳細に描かれている。場面は 72、登場人物の数は 626 人、動物の数は更に多く、粗い白麻布に 8 色の色糸を使った刺繍である。パリから急行で 2 時間余のバイユーの小さな町は長さ 70.34 m、幅 0.50 m のこのタペストリが四方の壁を一巡して陳列されている美術館を訪れる人でもっている観である。それにしても、針を一つ、また一つと、丹念にこのタペストリを一体誰が刺したのか（一説には征服王の妃マテイルダ Matilda とその侍女たちと伝えられているが信憑性はない）、とにかく美しく、また驚異的大絵巻物である。

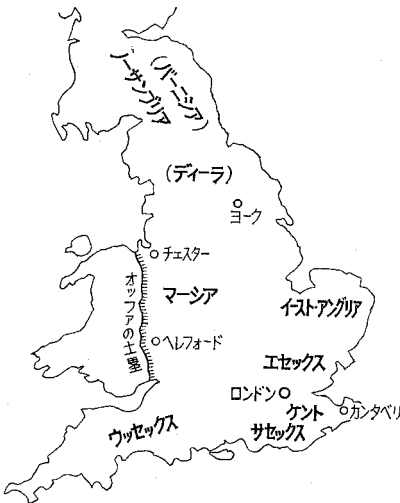
- 6) 英国皇太子の称号 プランタジネット Plantagenet 王朝第 5 代の王エドワード一世（『マクベス』地誌考）参看）がウェイルズのケルト族首長ルーエリン・アプ・グリユフィッド Llewelyn ap Gruffydd（または Llywelyn ab Gruffydd. d. 1282）を殺し、ウェイルズにもイングランドの州制度を施行し、各地（Flint, Rhuddlan, Builth, Aberystwyth, Conway, Caernarvon, Beaumaris, Harlech）にいわゆる Edwardian castles を築いたが、この時カーナーヴォン城の陣中で生まれた皇太子を王は Prince of Wales と宣した。これは 5 世紀頃からアングロ・サクソン人によって圧迫され、こ

のウェイルズの辺地に追いやられながらも独立を守ってきた最後のブリトン人は、故国の略奪者たるアングロ・サクソン人、すなわちエドワード一世に必ずしも臣従するものではなかった。その上首長ルーエリンの死によって独立国の誉が絶えてしまったため、エドワード一世は彼等が臣従を誓うことにおいて王子を与えることを約したといわれる（26項参看）。爾来イギリス皇太子はこの称号で呼ばれるようになった。最初がエドワード二世、ヘンリー五世、エドワード五世、ヘンリー八世、チャールズ一世、チャールズ二世、ジョージ二世、ジョージ四世、エドワード七世、ジョージ五世、エドワード八世（以上は前王の嗣子）、リチャード二世、ジョージ三世（この2人は前任王の孫）である。エドワード三世、ヘンリー六世、エドワード六世の3人は直系の皇太子であったがこの称号を帯びなかった。また黒太子エドワード、ヘンリー六世の子エドワード、リチャード三世の子エドワード、ジェームズ一世の子ヘンリー、ジョージ二世の子フレデリックは皆この称号を有したが即位しなかった。また老僭称者のジェームズ・エドワード James Francis Edward Stuart もこの称号を帯びていた。

- 7) Plymouth 50.23 N 4.10 W. デボンシャー Devonshire にある都市で、イギリス海峡にのぞむ軍港。百年戦争の際フランスへ軍隊を送る要港であった。新大陸発見当時は重要な役割を占め、1577年フランシス・ドレーク Sir Francis Drake (ca. 1540~1596. 1. 28. スペインの無敵艦隊を撃破した英国の提督) はここから世界一周に旅立った。有名なメイフラワー号がアメリカへ旅立ったのはこの港であった。
- 8) Ludlow 52.22 N 2.43 W. ウェイルズに接する州シュロプシャー Shropshire (Salop)——シュロプシャーそのものは A. E. Housman のその詩集 *A Shropshire Led* で広く世に知られているが、ラドローはこの州の南境セヴァン川 Severn (注11) 参看) の支流であるティーム川 Teme とコーヴ川 Corve の合流する地点に位置する。バーミンガム Birmingham から西南西に約60kmである。Castle は1086年に建造され、1581年増築されて、中世以来長い間国境統監 Lords President of the Marches の堂々たる居城であったが18世紀に廃墟となった。
- 9) Anne Boleyn アン・ブリン Anne Bullen ともいわれる。ca. 1507~1536. 5. 19. Sir Thomas Boleyn の娘。ヘンリー八世との結婚の正確な日を Holinshed は 'cannot be ascertained' と記していて、諸説があるが、1533年1月25日説が多い。また結婚の場所にも説がある。York Place (20項参看) とする説、ロンドン塔とする説である。とにかく1533年9月7日(日曜)にアンはグリニッチ離宮(17項参看)でエリザベス(後のエリザベス一世)を生んだ。しかしこれは男児を望んでいた王には大きな衝撃であった。その後1536年1月29日ヘンリー八世の最初の妃キャサリンの葬儀の日にアンは男児を死産している。この前後から王との間がうまくゆかず、王は同年5月2日アンを姦通罪と近親相姦の廉で(実は無実である)ロンドン塔に幽閉し、19日には斬首している。王はその翌日ジェーン・シモア Jane Seymour (ca. 1510~1537. 10. 24. 初代 Hertford 伯 Edward Seymour の妹。ヘンリー八世の妃キャサ

リンの侍女で、次いで二番目の妃アン・ボレーンの侍女となった。王との間に Edward VI をもうけたが、彼女は産後2週間も経ずして死した。尚、この王子 Edward VI はマーク・トウェーン Mark Twain の『王子と乞食』*The Prince and the Pauper* のモデルとなっている)を三番目の王妃とした。

- 10) Eton 51.31 N 0.37 W。古名 Eitun (1156年)。1207年には既に Eton となっている。OE *Ēa-tūn* で ‘tūn (=fence) on R. Thames’ の意。テムズ河を距てて隣接の Berkshire にあるイギリス王室の離宮ウィンザー城を眺むところにある。ここにイギリスで最も著名なパブリック・スクールであるイートン・スクールがある。創立者はケインブリッジのキングス・スクールと同じく5世紀のヘンリー六世である。この学校の正式名は The King's College of Our Lady of Eton Beside Windsor である。
- 11) Severn シェイクスピアの生地 Stratford のエイボン川 Avon を一支流とし、また ‘few words are best’ と歌い、名利を求めず、深癖な諦観詩人 A. E. Housman が歌った川である。
- 12) Northumbria 名の通り Humber 河の北から現今のスコットランドの低地地方フォースの入江 Firth of Forth に及ぶ地域を占めたアングロ・サクソン時代(7~8世紀頃)にあった七王国 Heptarchy の一つ。この七王国というのは厳密に七つの国があったというのではなく、この七王国のほかにもデイーラ、バーニシアなどの王国が記録されているからこの「七」という数はその比喩的表現とされる。



附 図 3

七 王 国

ノーサンブリア	Northumbria
マーシア	Mercia
イースト・アングリア	East Anglia
エセックス	Essex
ケント	Kent
ウェセックス	Wessex
サセックス	Sussex
(バーニシア)	Bernicia
(デイーラ)	Deira

- 13) Eboracum または Eburacum。ヨークの町は150年頃ブトレマイオス(1項参看)

- によって初めて *Ἐβόρακον* と誌された。これがラテン語化されて標記のようになった。これがアングロ・サクソン時代になって *Evorōg* となった。これは OE *eofor* (=wild, boar) と呼応し、更に語尾に *wīc* (=dwelling, farm, camp) がついて *Eoforwīc* (1053~66) となった。また *Eferwīc* (ca. 897), *Euorwīc* (ca. 1150) の記録もある。
- 14) *Petillius Cerialis* 別綴 *Cerealis* で70年頃活躍したローマの將軍。ローマ皇帝ウエスパシアヌス *Titus Flavius Sabinus Vespasianus* (9.11.9~79.6.23. r. 69~79) の近親の縁にあつて、61年には既にブリタニアに在った。71年ブリタニアの知事となり、その3年にわたる在任中に北方のブリガンテス族 *Brigantes* の討伐を行なつた。
- 15) *Chester* 当時 *Deva*。別名 *Castra*, また *Devana Castra* で、これは 'the camp on the river Dee' に由来する。ウェイルズ語で *Caerleon*, *Caerlleon*。ロンドンから北西に鉄道で約290km, 53.12 N 2.54 W の地点にある。附近で産出する赤い砂岩の城壁、同じ材で建造されたチェスター本寺など、ローマ時代、中世時代の面影を留める古い町である。
- 16) *Caerleon* 当時 *Isca* または *Isca Silurum*。ウェイルズの *Monmouth* 州にあり、アスク川に面するため *Caerleon-on-Usk* (*Usk* のラテン名が *Isca*) とも称され、ニューポート *Newport* の北東約5km内陸の 51.37 N 2.57 W の地点にある。アーサー王 *King Arthur* の宮廷のあったところの一つとして伝えられる。
- 17) 及び 18) 『ジュリアス・シーザー』地誌考』参看。
- 19) *Adeste, si quid mihi restat agendum.* *Becon's Essays, II. Of Death*, p. 4, Macmillan, 1952.
- 20) 『ジュリアス・シーザー』地誌考』参看。
- 21) ヨークには第二次世界大戦前までは中世の教会堂が21もあった。また中世の頃には41もの教会堂を有していた。
- 22) *Edwin* ca. 585~633. r. 617~633. *Eadwine* または *Eadwin* と綴る。この王の頃ノーサンブリアは七王国のうち政治的に最も有力で、文化的にも見るべき功績を残した。それはこの王が625年ケント王エセルベルト *Aethelberht* (または *Ethelbert*, *Aedilberct*. ca. 552~616) の娘で、また当時のケント王エアドバルド *Eadbald* (または *Aeodbald*, *Aethelbald*, *Aduwald*. r. 616~40) の妹であるエセルブルガ *Aethelburga* (または *Ethelburga*) を妃としたことによる。それはこれより先、597年に教皇グレゴリウス一世 (『ジュリアス・シーザー』地誌考』参看) が派遣したベネディクト派修道士アウグスティヌス *St. Augustine* (*Augustine of Canterbury*, あるいは *Austin*. *Apostle of the English* と称される。カンタベリーで604年あるいは613年死亡) は40人の修道士と共にケント王国の東岸サニット島に上陸し、エセルベルト王から布教の許可を得て、当時の首都カンタベリーで人民の教化につとめ、王も同年改宗して洗礼を受けた。さてエドウィン王とエセルブルガとの婚姻に当り、妃に随

行したカンタベリの主教で St. アウグスティヌスの弟子のパウリヌスの努力により、627年エドウィン王の改宗と共に、ノーサンブリアにもローマ・カトリックの普及が開かれた。このようにエドウィン王のキリスト教に対する理解はその甥オズワルド Oswald (r. ca. 635~642.8.5) を経て、その弟オズウィ王 Oswy (別綴次の如し。Osuiu, Oswiu, Oswio, Osguid, Osweus, Oswius. ca. 612~670. r. 642~670) の手になる664年のウィットビー Whitby (54.29 N 0.37 W) の宗教会議 Synod とつながった。また宗教詩人キャドモン Caedmon の出現となり、またビード(注4)参看)の『英国国教会史』の著作となって開花した。なお、スコットランドの Edinburgh はこのエドウィン王の名に由来する。

- 23) Paulinus 聖人。664年死亡。Paulinus of York と称される。グレゴリウス一世の命により St. アウグスティヌスの布教に助力するため601年イングランドに渡った。625年ヨークの主教に、633年ロチェスターの主教となった。
- 24) Wilfrid または Wilfried, Wilfrith ca. 634~709.4.24。ノーサンブリアに生まれ、ローマで修学した高徳にして敬虔な聖職者、聖人。664年のウィットビーでの宗教会議でローマ・カトリック側の指導的役割を果たした。665年ヨーク大主教となり、イギリスの修道院に初めて「ベネディクトゥスの戒律」を導入したことと、教会堂建築についての造詣とその実績で有名である。
- 25) Thomas Wolsey ca. 1475~1530.11.29。Ipswich (12項参看)の肉屋の子だといわれる。本劇中バッキンガム公がウルジイのことを 'This Ipswich fellow's insolence' (I. i. 138), また 'This Cardinal, Though from an humble stock' (IV. ii. 49) といっているのはこのことからであろう。オックスフォードの出身。枢密院議員 (1511年), ヨーク大主教 (1514年), 枢機卿 (1515年) など政府の要人となり、ヘンリー七世、ヘンリー八世時代その権勢をほしいままにした。ヘンリー八世と王妃キャサリンとの離婚問題から王との間が悪くなり、1529年退けられ、翌年引退し、ヨークに赴いたが、反逆罪で逮捕され、ロンドンへの護送中病死した。彼の当時の権勢を今日ロンドンから約24km 遡るテムズ河畔の豪壮な館 Hampton Court にみることが出来る。これは1514年(当時ウルジイはヨーク大主教)から1525年の間の建造になるもので、当時としては異例の広さとチューダー様式の華麗さをもつ大建築である。このような豪壮な館が建てられたことは無論ウルジイの時の権力のしからしめるところであるが、またこの時代の趨勢を示すものでもあった。1337年以降かの恐るべき百年戦争は国の経済を壊し、流行病と食糧危機をもたらした。建築はただ軍事建築となり、職人もかつての巧みな芸術的技術を失った。百年戦争の結果はイギリスはカレー Calais の町をようやく保つだけの全くの惨敗に終り、今や社会は全く往時の姿とは変わり、人心も変って、神に対する敬虔の念までも薄れてしまった。「1050年から1350年にいたる300年間にフランスでは80の大聖堂、500の大教会堂、数万の教区教会堂を建てた」(ジャン・ジャンペル)ように天を突くばかりの高い教会堂を

競って建立した神への信仰は既に冷えて、関心は己れの生活に向けられるようになった。それに加えてイギリスではヘンリー八世が芸術に無知であるばかりでなく、治世中幾度となく教会と衝突したが、結局は「法王と教会が失った権力はヘンリー八世が獲得し、その手にながちりと握った」(グーチ) ことにより、最早大聖堂の建造などは思いもよらぬ状態にあった。この頃イギリス建築史上ゴシック建築からテューダー式建築への移行の段階で、この期は上述のように王の力、国家の力としての建造はみられず、代りに首都を離れた地方に貴族や富豪はその財力を自分の生活の快適さと享楽に向ける傾向となり、己れの領地に豪壮な居館を建て、専用のチャペルを設けるという現象がおきた。その代表ともいべきものがウルジイの館で、フィレンツェの彫刻家マイヤーノ（またはマヤノ）Benedetto da Majano（または Maiano。Original name は Benedetto di Leonardo）——この人は1442年フィレンツェで生まれ、1497年5月27日同地に歿した優れた彫刻家、建築家で、ルネサンス宮殿建築を代表する彼の不朽の作品はフィレンツェのベッツキョ宮 Palazzo Vecchio とストロツツイ宮 Palazzo Strozzi に残されているが、この人のテラコッタの円形牌を装飾に用いるなどイタリア・ルネサンスの美を飾るなどウルジイ盛時の権勢を示すものであるが、先述のように王の不興を買って、この館は1526年ヘンリー八世に献上された。王はこれを手にしてから赤煉瓦のテューダー式建築に増築を行なって離宮とし、そのなかにはアン・ボレーンのための gateway も設けたりした。3番目の妃ジェーン・シーモア（注9）参看）はここでエドワードを生んで、死している。王はまたこの宮殿で5番目の王妃となったキャサリン・ハワード Catherine Howard (Thomas Howard の姪。1540.7.28にヘンリー八世と結婚、王によって1542.2.13にロンドン塔で斬首された)と、更に第6番目にして最後の妃キャサリン・パア Catherine Parr (ca. 1512~1548.9.7。王とは1543年に結婚)と結婚した。この宮殿のなかに「幽霊出現の間」という部屋があるが、そこには第3王妃のジェーン・シーモアと第5王妃キャサリン・ハワードの幽霊が出るとのことである。

この宮殿はその後オランダ公ウィリアム三世とメアリ女王(名誉革命後、夫のウィリアム三世と共に王位につく)の命によりレン（注35）参看）の手によって大改築され、イギリス・ルネサンス期建築の美を誇っている。

- 26) Richard Turpin 生年が1705とも1706ともいわれるが1706説が多い。‘Dick Turpin’の名で知られたイギリスの追剥ぎ。Essexのサフロン・ウォールデン Suf-fron Walden の東北約10kmにあるヘムステッド Hempstead の宿場の子に生まれた。家畜泥棒をもってその道に入り、後トム・キング Tom King と組んで主にケインブリッジ街道で追剥ぎをしていたが、過って Tom King を射ち、ヨーク州に逃げたが、ヨークで捕えられ絞首された。1739年早朝のことであった。アインズワース W. H. Ainsworth (1805~82。夏目漱石の『倫敦塔』はこの作者の *The Tower of London* に負うところある) の *Rookwood* にターピンが登場する。彼は駿馬

Black Bess にまたがり、アリバイをつくるため夜のロンドンを北へと駆って、一夜のうちにヨークに着き、秋の朝日の染めるヨーク大聖堂の尖塔を遙かに眺めた時に、鞍下の愛馬は斃れ、鞍上の彼は縛についたと。彼とその愛馬 Black Bess を題材とした多くの伝説や俗謡がある。

- 27) Guy Fawkes 『『マクベス』地誌考』参看。
- 28) Henry II 1133. 3. 5~1189. 7. 6. r. 1154~1189. アンジュー Anjou 家最初のイングランド王。プランタジネット王家 House of Plantagenet の祖。父からアンジュー伯領、母からイングランドとノルマンディを継承し、更にエレアノール=ダキテーヌ (1122~1204) との結婚でアキテーヌ地方を得、ルイ七世と戦ってブルターニュ地方を得てフランスの西半分を手中にし、フランスにおいてフランス王以上に大きな領地と勢力を獲得した。教会の裁判権のことでカンタベリ大主教ベケットを殺害した (15 項参看)。
- 29) Edward II 1284. 4. 25~1327. 9. 21. Prince of Wales の称号を帯びた最初の皇太子 (注 6 参看)。ために Edward II of Caernarvon と呼ばれる。父王と異なり、生来暗愚、精力と強い性格を欠き、ために諸侯の勢力を抑えられず、また父王の残した外国の領土を維持出来なかった。前代に引続いてスコットランド遠征を行なったが、バノックパーンでロバート・ブルースに大敗した (『『マクベス』地誌考』参看)。王妃イサベラ Isabella (1292~1358. フランス王フィリップ四世の娘) のために捕えられ、グロスター Gloucester の近くのパークレー城 Berkeley Castle で暗殺された。
- 30) Michel Eyquem de Montaigne 1533. 2. 28~1592. 9. 13. ルネサンス期フランスのモダリスト。モンターニュと発音するのが正しいが、一般にはモンテーニュといわれる。この名は元来がモントラヴェル男爵領に属する地名から来ていて、本当の名はミシエル・エーケム Michel Eyquem である。代々ボルドオ市の商人であったが曾祖父の代に貴族となり、祖父はボルドオ市の名誉職、父は市長になった。彼は 20 歳で法官に就き、ボルドオ高等法院参議を 12 年間も勤めたが、性分に合わずただ憂鬱を昂じ、神経を弱めるばかりであったので、彼は 1570 年僅か 38 歳でその職を辞した。1571 年モンテニューの館に隠棲したが、1581 年、1583 年と二期市長に選ばれた。『随想録』で有名。
- 31) Charles Louis de Secondat Baron de la Brède et de Montesquieu 1689. 1. 18~1755. 2. 10. フランスの法学者、啓蒙思想家。『法の精神』、『ペルシア人の手紙』が主著作。
- 32) Offa 757~796. マーシア王国の最盛期を築いた王で、法典を纂んだ (現存しないがそれはアレフレッド大王につながれた)。ウィ川 Wye の河口からデイ川 Dee の河口に及んで、今日ウェイルズとイングランドとの境界を 102 km にわたり築いた塁は「オフファの土塁」Offa's Dyke として有名。
- 33) St. Ethelbert または Aethelberht, Aegelbriht 794 年死亡。ヘレフォードの聖堂

の守護神として崇められている。

- 34) Thomas à Becket 1118~1170. 12. 29. ヘンリー二世に登用され大法官を経て、1162年カンタベリー大主教となったが、やがて王が王権強化を図って、教権を圧迫したため王と対立し、フランスを経てローマに赴き、争論5年の後、すなわち1170年和解がなって帰国したが、フランスから彼を追ってきた王の騎士4人の手により、回廊から大聖堂に入る入口——後にここは Martyrdom の戸として有名になった——の傍で斬殺された。1170年12月29日、火曜日であった。4人の騎士、それは William de Tracy, Reginald Fitzurse, Richard le Breton, Hugh de Morville の名であった。但し Hugh de Morville 一人は手を下さなかった。ヘンリー八世は宗教改革で僧院解体の時大聖堂内の聖トマスの聖堂を破壊し、聖トマスの遺骨を四散させた。彼の殉教はテニソン (*Becket*), T. S. エリオット (*Murder in the Cathedral*) などによって扱われている。ベケットに仕え、ベケットがヘンリー二世と決定的対立に至った1164年のノーサンプトンの公会議でも彼をなだめ、更にベケットの死の現場にも居合わせたウィリアム・フィッツステイーヴン (William Fitzstephen (1190? 歿)) はその『聖トマス・ベケット伝』*Life and Passion of Archbishop Becket* (1174年に書かれたが、初版は1723年) で、ベケットが「そこにいることによって」カンタベリーに光彩を添えたと同じく、「出世によって」ロンドンに光彩を添えた (ベケットは生粋のロンドン児であるから)、と述べている (R. J. ミッチェル)。
- 35) Sir Christopher Wren 1632. 10. 20~1723. 2. 25. イギリス・ルネサンス建築の完成者。オックスフォードの数学の出身で、天文学の教授となったが、建築に転じた。1666年ロンドン大火の再建者として活躍。多くの学校、教会、劇場を手がけた。主作品はセント・ポール寺院、ケインブリッジのトリニティ・カレッジ図書館、バンプトン・コートなどである。
- 36) Philip II Philippe II Auguste (Philip Augustus) 尊厳王と称される。1165. 8. 21~1223. 7. 14. r. 1180~1223. カペー王朝の最盛期をもたらした王。イギリス王 John (欠地王 Lackland と称される位愚迷な王でフランスにあったイギリス領土を殆んど失った) からノルマンディ、ブルターニュを奪取し、大いに国威をあげ、またパリ大学を創設するなど文化面、産業面でも秀れた政策を行ない、大国家としてのフランスの基礎を定めた。
- 37) Charles V Charles le Sage (Charles the Wise) 賢明王と称される。1337. 12. 3. ~1380. 9. 16. r. 1364~80. 国の内外の問題によく対処し、特にイギリスに占領されていた領土をカレーとボルドオをのぞき、すべて取り戻した。また学芸を保護し、ルーヴル宮に蒐集されている貴重本はこの王の力による。
- 38) John Wycliffe (または Wyclif, Wiclif, Wickliffe) ca. 1320~1384. 12. 28. 宗教改革の先駆者。オックスフォードに学び、同大学の Balliol College の学寮長となった。聖書を唯一の信仰源泉として、通俗語で福音を説き、聖書の知識を普及するため、

その英訳を行なった。これは英語発達史上に一時期を劃するものである。死後彼は異端者と宣告され (1415)、ラッターワーズ Lutterworth (52.28 N 1.10 W。レスター州 Leicestershire にあり、ラグビー Rugby の北約 12 km。彼が公職を追放された後住み、歿した地) にあった遺骸は掘出され、焚刑に処され、近くの小さなスウィフト川 Swift に捨てられた。彼は神学者として有名になる前に既に哲学者として名を成していた。

- 39) Isle of Thanet ケント州の北東端部に位置する地帯。島と名づけられているが、島ではなく、スタッフ川 Stour の分流とこれに平行する古代の運河により島の趣きを呈する。この一帯と北極の間に介在するものなし、といわれる程空気が澄んでいることで有名。
- 40) Ebbsfleet または Ebbs Fleet。サニット島にある小村。ドーヴァー海峡ベグウェル湾 Pegwell Bay に面し、1750 年頃に早くも開けた summer resort のラムズギート Ramsgate (現地ではラムズゲイト) の南西約 7 km の地点にある。ここは St. アウグステイヌスの上陸地点というほかに、今一つ英国史上重大な歴史を有する地点である。それは 449 年、当時ブリテン島は北方から侵入するピクト族 Picts やスコット族 Scots に悩まされていて、時のケント地方の王フォルティゲルン Vortigern なる者が領土防衛のためにジュート族 Jutes の首長ヘンゲスト Hengist (または Hengest。488 年歿) とその弟ホルサ Horsa (455 年歿) に救援を求めた。この二首長が上陸したのがこの地であった。しかし「薬の方が病気よりも悪かった」(モセ) と云われるように彼等はブリテンに居据って、ブリテン島へゲルマン民族侵入の切掛をつくってしまった。このことはビードの『英国国教会史』に書いてあることである。
- 41) Lanfranc ca. 1005~1089. 5. 24。イタリアのパヴィア Pavia (45.12 N 9.09 E) で生まれ、カンタベリで歿す。ボローニア Bologna (44.30 N 11.20 E) の大学でローマ法を学び、パヴィア大学教授として当代のローマ法、教会法の権威であった。神学研究を志し、1045 年ル・ベック修道院長となった (ル・ベック Le Bec-Hellouin はエヴリュエー Evreux の北西約 40 km に地点。このベック修道院はランフランクとアンセルム (28 項参看) の二人によってその名を高め、またこの二人は共に後カンタベリ大主教となった)。ウィリアム公 (後のウィリアム征服王) の結婚に反対し、追放されたが、1056 年逆に二人の仲が好転した。1063 年カーン修道院長。1070 年、当時のカンタベリ大主教でローマ法王に反抗的であったスティガンド Stigand (ca. 1072 ウィンチェスターで歿した)。エドワード証信王の信任厚く、1052 年カンタベリ大主教となった) を廃し、自らその地位につき、ウィリアム征服王のイングランド統一政策に助力した。

後記 この稿を草するに当たってはその性質上多くの辞典、歴史書、地図、シェイクスピア劇のテキスト、現地で直接見聞したこと、及びその記録、現地で入手したパンフレットの類を参照したが、煩雑をさけて参考書はその主たるものと定める。

- Encyclopaedia Britannica
 Everyman's Encyclopaedia
 The American Peoples Encyclopedia
 Webster's Geographical Dictionary
 The New Century Cyclopedia of Names
 Kenneth Cameron, English Place-Names, B. T. Batsford LTD, London, 1961
 P. H. Reaney, The Origin of English Place-Names, Routledge and Kegan
 Paul, London, 1969
 England, Ernest Benn LTD
 London, Ernest Benn LTD
 F. G. Stokes, A Dictionary of the Characters and Proper Names in the
 Works of Shakespeare, New York, 1970
 Shakespeare's Holinshed
 Concise Dictionary of National Biography 1

岩波西洋人名辞典

中川芳太郎 『英文学風物誌』 研究社

石田憲次 『英文学風土記』 研究社

『イギリス美術』（世界美術大系）講談社

F. モッセ著、郡司利男・岡田 尚訳 『英語史概説』 開文社

R. J. ミッチェル, M. D. R. リーズ共著、松村 赴訳 『ロンドン庶民生活史』 みす
 ず書房

G. P. グーチ著、堀 豊彦・升味準之輔英訳 『イギリス政治思想』（1）岩波現代叢書
 ジャン・ジャンペル著、飯田喜四郎訳 『カテドラルを建てた人びと』 鹿島研究所出
 版会